

院外の透析非導入患者への当院倫理委員会の介入

長崎腎病院

○江藤りか 藤原久子 白濱美和 白井美千代 丸山祐子 佐々木修 一ノ瀬浩 澤瀬健次 原田孝司 船越哲

【はじめに】

近年、病病連携が盛んになり、当院においても腎機能のフォローのための紹介が増加傾向にある。

今回、他院に入院中の患者で、末期腎不全のため、透析導入が必要となったが、本人、家族の強い希望で透析導入を見送った症例を経験したので報告する。

【症例】

90才男性、外傷後リハビリ目的で病院入院中。腎機能の低下が認められたため、当院紹介となった。

【経過】

紹介当初より、透析導入は希望しないと患者・家族が意思表示しており、事前指示書に「透析を希望しない」という記載と、本人・家族の署名がなされたものが提出された。主治医は、透析導入しない場合にたどる転機を説明し、透析室の見学もしてもらったが、本人・家族の意思は変わらなかった。また、患者は高齢であり、判断能力や自殺企図に関して精神科医の判断が必要と考えたが、家族の承諾を得ることができなかった。また、本症例では、入院先にも主治医がいるため、医師間で連絡を取り合い、また、当院で倫理委員会を開催し、患者の尊厳を考慮し、透析非導入の意思を尊重することとなった。

【考察】

超高齢化社会において、他院に入院中の患者が末期腎不全で紹介されるケースが増加することが考えられ、病院間、主治医間での情報共有、更に家族とのコミュニケーションが方針を決定していくうえで重要ではないかと考える。